

れてゆくのは、又、限りなくわびしい。私が小学生の頃桜川の土堤は両側から橋の大木が枝をかわし、その華麗さはたぐいもなく、あわあわと春の暮れてゆくのを、子供心にも惜しんだものである。

早春の若い心には、胸が痛い程、うす青く芽ぶいた柳も、公害に見る影もなく、白茶けてゆく。あの懐かしい大きな手で消しさったと思う他はない。川を埋めたてた事によって、街は何分かのプラスを得たかも知れないが果して、川の命と引きかえる程の利があたえられたらうか。平凡な女である私には、只殺人的な喧騒が、交通戦争や、公害と一緒にあって、イライラ度をかきたてるだけであり、ありし日の川のある風景に只やるせない郷愁を覚えるのみ。

埋め立てられた川はもう永久に帰らないけれど、せめて今残っている僅かな川だけでも必死に守ってゆかなければ。今や水への郷愁等と感傷にひたってはいられないのである。

県の南都、霞ヶ浦に望み、桜川の水堀を巡りし、昔から水の里と知られた土浦の人間が、これ以上、水に無関心でいたら、天罰は、てき面に下り、命にかかわる将来がすぐにもやってくる。近頃水をきれいにする運動が活発になってきたのは喜ばしい事だけれど、ここ一番大手

衝をほどこし、市民の一人一人が看とらなくては、瀕死の湖も川も決してよみがえらないのである。

### 桜川とその附近の 史蹟を探る(第五回)

永山正

#### 一、多気城と多気義幹の墓

北条の市街地の後背に夢のようにそぼたっている小山ここが多気城址で城山あるいは多気山とよんでいる。

ここにはじめて城を築いたのは平維幹ですぐ近くの水守城からここに移ってきた。彼はもちろん平氏の一族で父は平将門の乱を平定した平貞盛の弟繁盛である。貞盛将門の乱を鎮めた功勞で都に召されたので常陸大掾の職を弟繁盛に譲ったわけである。常陸の国府は今の石岡であつたから彼はここに居城をおいて政務は国府でみたわけである。彼が若いころ都にあつて小野宮右大臣実資に仕えているうち高階成順の娘をみそめ乳母と共に略奪して水守城に帰ったロマンスはあまりに有名な話である。維幹から為幹、重幹、致幹、直幹、義幹と六代この多気城に居って威をふるった。致幹のとき源頼義の前九年の役に従軍し帰りに頼義はこの多気城に逗留し致幹の娘と